

「大腸内視鏡治療」

工藤 進英 著

近畿大学第1外科

安 富 正 幸

工藤進英氏による「大腸内視鏡治療」が上梓された。今日では大腸内視鏡は単なる検査手段ではなく、重要な治療手段である。本書は「早期大腸癌」、「大腸内視鏡挿入法」とともに工藤氏の三部作である。その中でも本書は治療に主眼を置いているが、治療の裏付けとなる正確な診断が十分に盛り込まれている。工藤氏は1993年、「早期大腸癌」を出版し、当時は「幻の癌」であった平坦・陥凹型の癌が存在することを証明され、更に摘出標本の実体顕微鏡的観察から、腫瘍の組織型と癌深達度と pit pattern が深く関係することを証明された。この研究は拡大電子内視鏡の開発に進み、今日の拡大電子内視鏡診断による病変の質的・量的な診断が可能になったのである。

わが国においては、癌を始めとする大腸疾病の増加が大きな社会問題となっており、近い将来に大腸癌が癌死亡の第1位になるであろうと予想されている。大腸癌に対する検診の重要性、特に内視鏡検査による精密検査の必要性が叫ばれている。内視鏡技術の向上と内視鏡医の増員こそは現在の日本にとって最大の急務であると言っても過言ではない。

工藤氏が今から8年前に大腸の平坦・陥凹型の癌の存在を強調された

意義は大きい。この平坦・陥凹型の早期癌は早期胃癌に馴染んできた日本の医師には違和感なく受け入れられたが、欧米の内視鏡医や病理学者にとっては青天の霹靂とも言うべき新事実であった。今でもその傾向がある。更に工藤氏はこれら病変の長期間にわたる観察と詳細な病理学的な診断から、今回の「大腸内視鏡治療」を執筆された。

最初に述べたごとく、内視鏡は単なる検査手段ではなく早期の診断・治療、それも最も低侵襲性の、期待の治療手段である。内視鏡治療は最も望まれている治療であるし一般診療医の必須の知識と技能でもある。本書では“安全な治療の基礎となる内視鏡挿入法”に始まり、一人法による軸保持短縮法の有用性を手技を中心に平易に説明されている。長年にわたる経験から実に安全で簡便な挿入法が示してある。次に“大腸腫瘍に対する最近の考え方”では、今までの工藤氏の理論が美しいカラー図をふんだんに使って示されている。これまた理解しやすい。“早期大腸癌の内視鏡診断”では大腸病変の隆起型や平坦陥凹型の大腸病変の存在診断から質的診断、更には量的診断、つまり深達度診断の理論と実際が平易に説明されている。この質

的・量的診断は治療の根幹をなす所見である。更に、多数の症例の長期にわたる観察データは病変の将来予測を示しており、治療指針として不可欠のものである。

次の“内視鏡的粘膜切除術(EMR)”は本書の核心部分であって、内視鏡治療の適応では単に内視鏡診断に基づいた治療だけではなく、肉眼形態と大きさからみた適応、深達度診断からみた適応、EMRの手技と続く。基本的な手技や器具からコツに至るまでわかりやすく書かれている。大腸内視鏡治療で最も嫌われるものに合併症がある。“内視鏡治療の合併症”の章では、いかにして合併症がなく安全に、しかも完全に病変を切除することができるかが7万例の経験の中から述べられている。

多数のカラー写真と膨大な症例を使って技術と理論の根拠が明快で平易に説明されている本書は、大腸内視鏡に関係する医師や看護婦が一度は読む価値のある必携の書であると言える。

●B5 頁176 図28 写真4
カラー写真147 色図6 表22
2000 定価(本体15,000円+税)
送料実費

医学書院 刊(☎03-3817-5657)